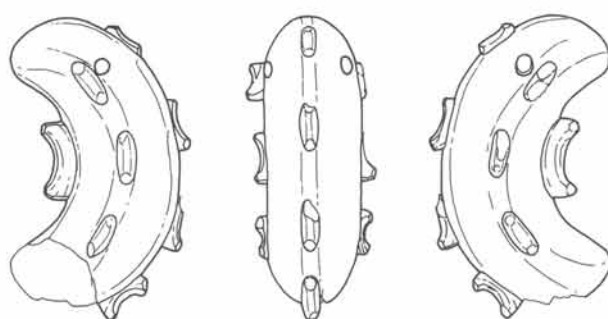


(財)和歌山県文化財センター年報

2001



財団法人 和歌山県文化財センター



1. 徳蔵地区遺跡 弥生時代前期の井堰



2. 高田土居城跡 北外郭部 (航空写真)



3. 粉河寺大門 屋根本瓦葺き



4. 旧中筋家住宅主屋 修理前の土間空間

目 次

表紙カット・西庄遺跡出土子持ち勾玉

巻頭図版

1. 徳蔵地区遺跡 弥生時代前期の井堰
2. 高田土居城跡 北外郭部（航空写真）
3. 粉河寺大門 屋根本瓦葺き
4. 旧中筋家住宅主屋 修理前の土間空間

平成13年度（財）和歌山県文化財センター受託事業一覧	2
受託事業所在地	3

埋蔵文化財／発掘調査

北馬場遺跡の第2次発掘調査	4
楠見遺跡の第3次発掘調査	5
田屋遺跡の発掘調査	6
県立医大跡地（和歌山城跡）の発掘調査	8
徳蔵地区遺跡第5次調査の概要	10
高田土居城跡他発掘調査	14
古川遺跡他の発掘調査	16
国道424号道路改築工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	18
南部荘園関連遺跡発掘調査	19

文化財建造物／保存修理

重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理	20
重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理	22
県指定文化財 荒田神社本殿保存修理の設計監理	24
旧中筋家住宅未指定建造物（味噌部屋・茶室）調査	25

関連研究

橋本における18世紀前中期町家建築の編年的特徴	26
-------------------------	----

普及活動

徳蔵地区遺跡発掘調査現場の普及活動	27
第11回 速報展「紀州の歩み」を終えて	28

海外研修報告

平成13年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修（中国）参加報告	30
（財）和歌山県文化財センター 平成13年度概要	32

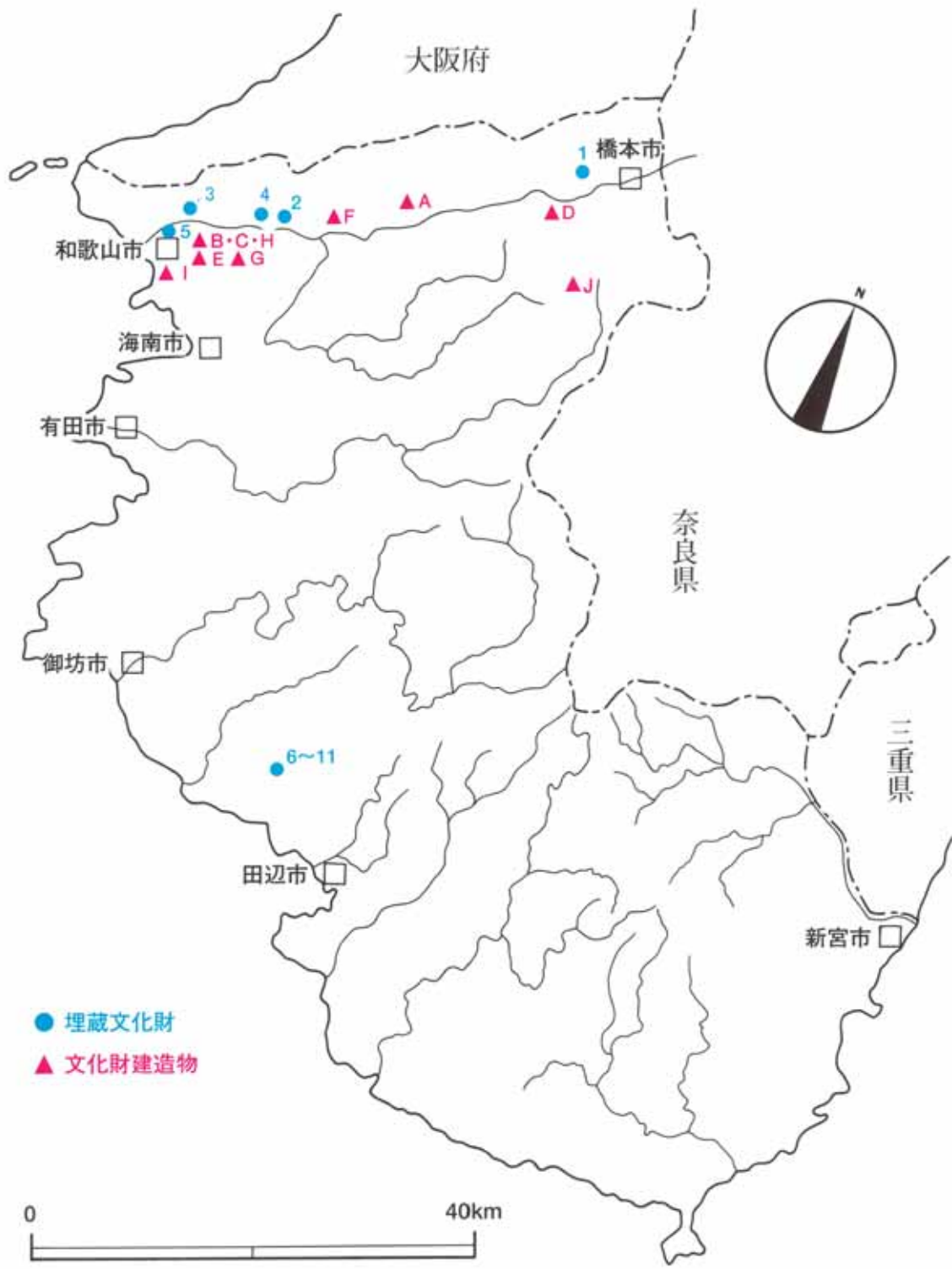
平成13年度 (財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財発掘調査事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	京奈和自動車道橋本道路建に伴う北馬場遺跡発掘調査	橋本市	13. 5.17~13. 8.31	1,131m ²	国土交通省 近畿地方整備局
2	県道和歌山貝塚線改良工事に伴う川辺遺跡発掘調査	和歌山市	13. 1.28~14. 6.30 14年度へ繰り越し	1,230m ²	和歌山県
3	都市計画道西脇山口線改良工事に伴う楠見遺跡第3次発掘調査	和歌山市	13. 8.22~13.11.30	413m ²	和歌山県
4	県道紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う田屋遺跡発掘調査	和歌山市	13. 8. 1~13.11.30	942m ²	和歌山県
5	旧県立医大跡地(和歌山城跡)発掘調査	和歌山市	13. 5.19~13. 8.31	410m ²	和歌山県
6	近畿自動車道南部IC建設に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	南部町 南部川村	13. 4. 3~14. 3.29	13,167m ²	日本道路公団
7	県道上富田南部線整備に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	南部町	13. 7.28~14. 3.31	2,530m ²	和歌山県
8	古川高速関連改修工事に伴う古川遺跡他発掘調査	南部町 南部川村	13. 7.31~14. 3.31	2,234m ²	和歌山県
9	国道424号線道路改築事業に伴う徳蔵地区遺跡他発掘調査	南部町 南部川村	13. 7.27~14. 6.30 14年度へ繰り越し	4,341m ²	和歌山県
10	南部荘園関連遺跡発掘調査	南部町 南部川村	13. 6.21~13.12.21	180m ²	緑資源公団
11	南部荘園関連調査業務	南部町 南部川村	13. 6.21~13.12.21	36m ²	和歌山県
12	西庄遺跡第4次出土遺物整理	和歌山市	13. 4. 5~13. 6.30		和歌山県
13	西庄遺跡第5次出土遺物整理	和歌山市	13. 7. 2~14. 3.31		和歌山県

文化財建造物設計監理事業

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財 粉河寺大門 保存修理設計監理業務	那賀郡 粉河町	13. 4. 1~14. 3.31	1棟	宗教法人粉河寺
B	重要文化財 旧中筋家住宅主家他 保存に関する修理修復業務	和歌山市	13. 4. 1~14. 3.31	6棟	和歌山市
C	重要文化財 旧中筋家住宅 保存修理設計監理業務	和歌山市	13. 4. 1~14. 3.31	6棟	和歌山市
D	重要文化財 丹生官省符神社本殿 保存修理設計監理業務	伊都郡 九度山町	13. 7. 1~14. 3.31	3棟	宗教法人 丹生官省符神社
E	重要文化財 旧谷山家住宅主屋他 保存修理設計監理業務	和歌山市	13.11.20~14. 3.31	2棟	和歌山県
F	県指定文化財 荒田神社本殿 保存修理設計監理業務	那賀郡 荒岩出町	14. 1. 1~14. 3.31	1棟	宗教法人 荒田神社
G	市指定文化財 光恩寺庫裏 保存修理設計監理業務	和歌山市	13. 8. 1~14. 3.31	1棟	宗教法人 光恩寺
H	旧中筋家住宅未指定建造物調査業務	和歌山市	13. 7. 1~14. 2.28	2棟	和歌山市
I	史跡 和歌山城御橋廊下 復元基本設計業務	和歌山市	13.11.20~14. 3.15		和歌山市
J	重要文化財 金剛三昧院経蔵他 保存修理設計監理業務	伊都郡 高野町	13.11. 1~14. 3.31	2棟	財団法人高野山 文化財保存会



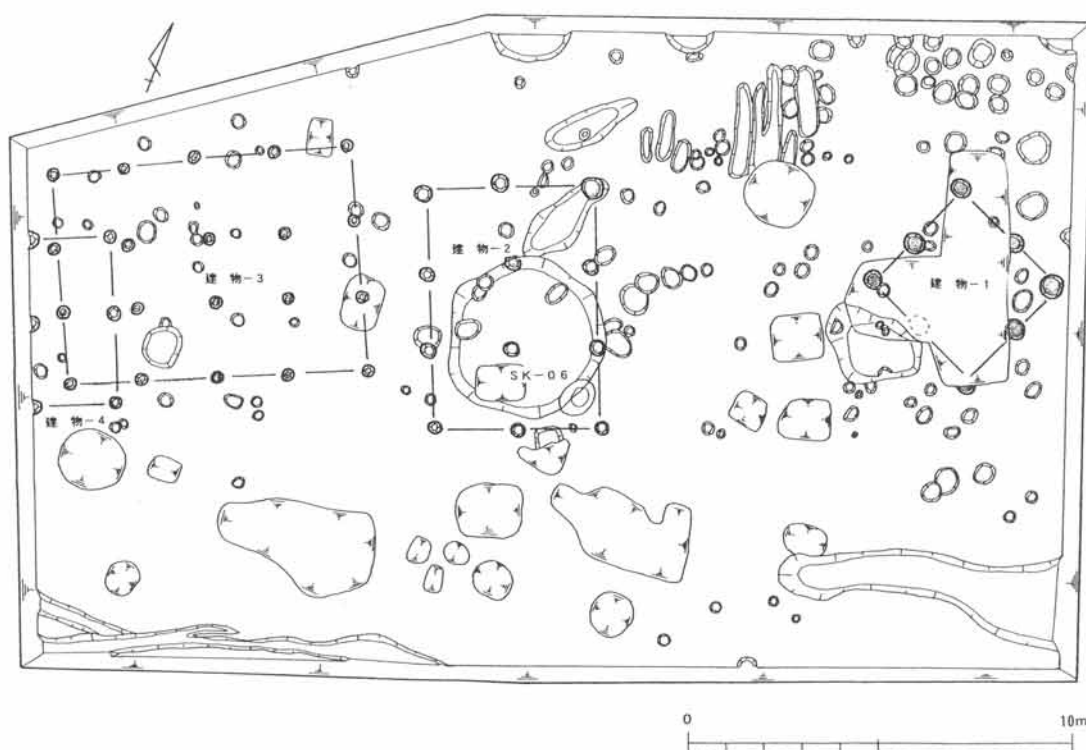
受託事業所在地

北馬場遺跡の第2次発掘調査

北馬場遺跡は橋本川左岸、標高110mほどの小高い丘陵地に位置している。

今次の調査においても1次調査と同様に量的には極めて少ないものの縄文時代中期の土器が確認されており、この地における人々の営みがかなり古い時期まで遡ることがあらためて判明したと言えよう。つづく縄文時代後期から弥生時代中期、また古墳時代前期から中期にかけては、遺物を欠いているもようで、集落としては途絶していたものと考えている。出土遺物から見ると、集落が新たな展開を見せ始めるのは奈良時代にはいつてからのようで、つづく平安時代から鎌倉時代、そして室町時代へと連綿としてつづいていった様が窺がえる。中でも鎌倉時代前半期がこの集落としては盛時であったようで、この期の遺物・遺構が最も多い。今次の調査でも図示したようにA区において4棟の建物跡を検出したが、1次調査では鎌倉時代と思われる10棟の建物跡が確認されており、この期のものは、都合14棟と多くを数える。これらの建物の性格および集落の帰属といった点については不明と言わざるを得ないが、時期的には当地を含む現在の橋本市の西半部が覚鑿の蜜巖院領の荘園（相賀庄）として立券される前後の時期に当てっており、少なくとも文献史料から（北）馬場村の名前が確認される室町時代（1377）よりかなり早い時期から相賀庄内の一村として営みがなされていたことは確実と言えよう。

（村田 弘）



A区 遺構平面概略図

楠見遺跡の第3次発掘調査

楠見遺跡は、紀ノ川の河口から5kmほど遡った右岸に位置する。昭和44年の調査において、陶質土器が多量に出土したことで全国的にも著名な遺跡である。また、近くにはわが国では唯一の出土例である馬甲が出土したことで有名な大谷古墳が所在しており、当地一帯は韓半島の色彩の濃い遺物が出土することで知られている。

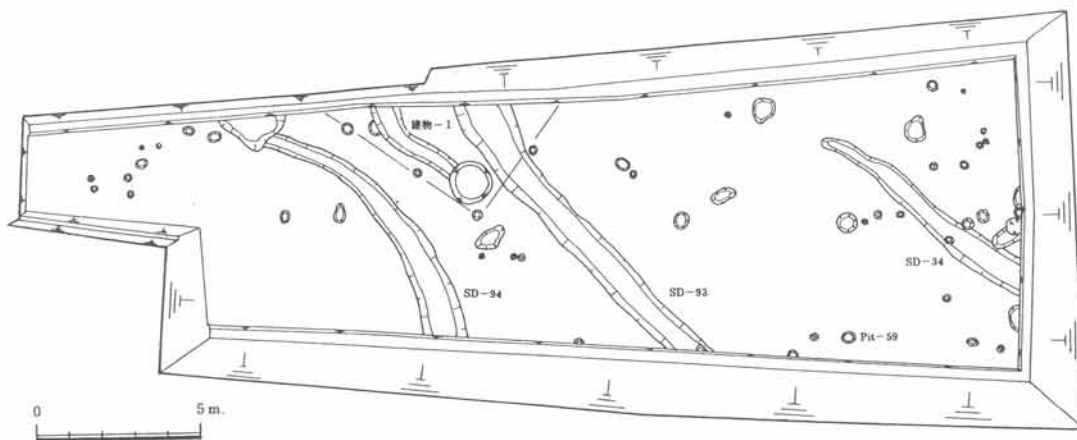
本年度の調査区は県道粉河加太線を挟んで楠見小学校の北側に当る地区である。調査では4面の遺構面を確認したが、このうち第1・2面は室町時代、第3面は鎌倉時代と考えられる。各面ともいくつかの土坑・柱穴などが検出されたが、具体的な遺構を復元するには至らなかった。第4遺構面では下図にも示したように、建物跡のほか北西から南東に流れる幅50~70cmほどの溝を3条検出している。このうち建物1は、出土遺物から平安時代末ないし鎌倉時代初めと思われるもので、柱穴の径は30cmほど、柱間は2.4mを測る。規模については調査区外に延びているため不明である。3条の溝のうちSD-34としている溝からは縄文時代（晩期か）の土器片が少量出土している。他の溝については、遺物がなく時期は不明である。また、Pit-59からは写真にも示すように弥生土器の壺・甕片が出土している。

本年度の調査およびこれまでの調査成果からみて、当調査区付近は平安時代末ないし鎌倉時代からはじまる中世集落の東辺部にあたるものと思われる。それ以前の時代については、少量の遺物が確認されるものの不明と言わざるを得ない。とくに陶質土器については、今回の調査では確認されておらず、昭和44年に楠見小学校校庭で発見されたものとの関連づける新たな資料は得ることができなかった。

(村田 弘)



Pit-59 土器出土状況



第4遺構面概略図

田屋遺跡の発掘調査

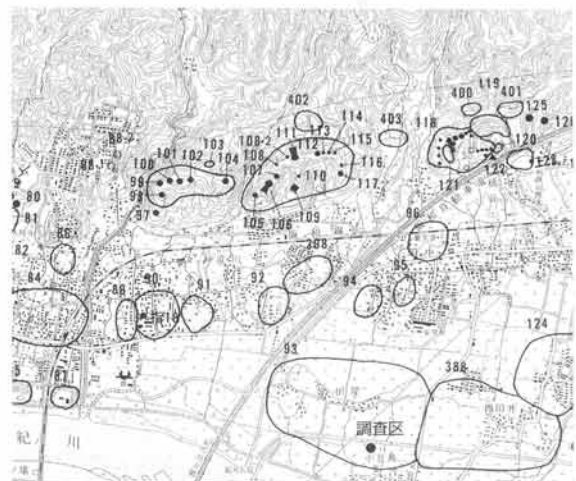
本調査は、紀伊田井ノ瀬線道路改良事業にともなう発掘調査で、約942m²の調査を実施した。田屋遺跡は、1981～1985年にわたり本調査区に隣接する一般国道24号バイパス線建設工事に先立ち実施された発掘調査において、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落が発見された。さらに、縄文時代の土坑や古代から中世にかけての掘立柱建物なども検出されたことから、田屋遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡と考えられる。また、周辺には本遺跡と同様に弥生時代から古墳時代の集落が発見されている西田井・北田井遺跡なども所在する（第1図）。

調査成果 本調査では、基本層序として第1～7層を認めており、古墳時代から近世以前までに属すとみられる3つの遺構面を検出した。以下に、その概要について記す。

第1遺構面は第5層上面で検出し、ピット状遺構を多数発見した。遺構検出面には酸化マンガン粒を多量に包含する土壌が帯状に認められ、他の部分と異なる土壌の堆積があったことを窺える範囲が確認できた。さらに、ピット状遺構がこの帯状の範囲に集中する傾向が認められ、その範囲の平面形態や後述する第2遺構面で検出した畦畔状遺構（遺構3下層）との重複状況から、この帯状の土壌の異なる範囲は水田遺構における畦畔の痕跡であると判断した。この畦畔の方向性は、N-33°-Eの方向性をもつ。出土遺物が少ないものの、中世以降に属すとみられる。

第2遺構面は、第6層上面で検出した。遺構としては、畦畔状遺構（遺構3下層）と第1遺構面以上の多数のピット状遺構を発見した。また、第1遺構面と同様の酸化マンガン粒を多量に包含する土壌の範囲も検出され、これらも畦畔の痕跡と判断している。これらは第1遺構面同様N-33°-Eの方向性を示し、それにほぼ直行する痕跡（遺構7）も認められ、南北方向のみでなく、東西方向にも水田区画を行っていたことが確認できた（第2図）。時期は、第2遺構面を形成する第6層中に認められる遺物から13世紀中葉以降であると考えられる。

第3遺構面は第7層上面で検出したものの、大半は流路18で占められている（第3図）。流路18は、幅30m以上、深さ約2m以上を測る河川とみられる。トレンチを設定し、埋没状況を確認したところ、自然堆積によるとみられる3段階の埋没過程が認められた。最下層からは、8世紀前半を下る遺物は出土せず、最上層では13世紀前半までの遺物が認められる。これらのことから、流路18は奈良時代に埋没が開始し、その後中世に埋没が終了するまで機能したと考えられる。



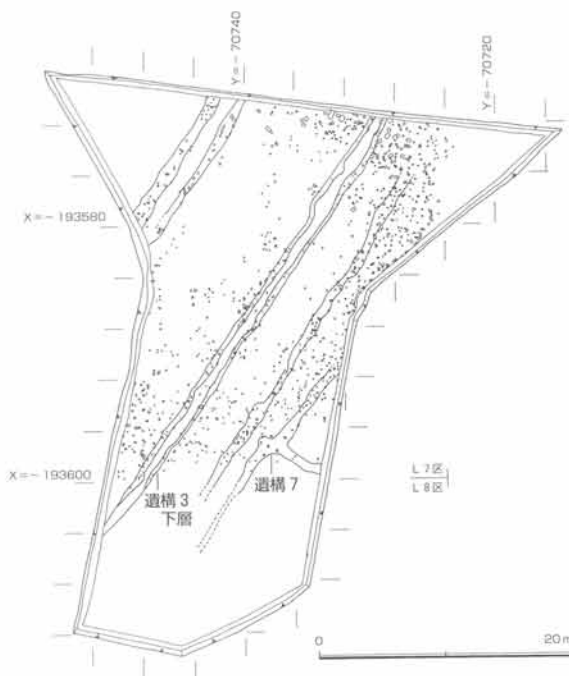
第1図 調査区位置図 (S=1/50,000)
93. 田屋遺跡 124. 北田井遺跡 388. 西田井遺跡

第3遺構面では、流路18以外に不整形土坑1、溝状遺構6、流路1、竪穴住居1などを検出した。以下に、主たる遺構について概要を述べる。

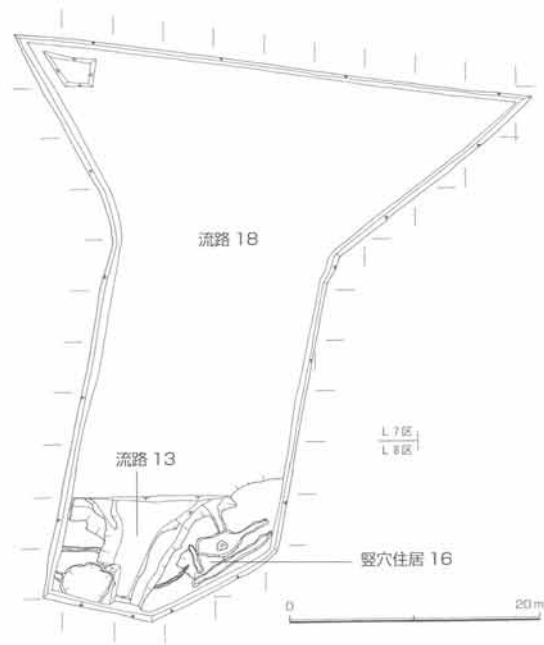
流路13は、先述の流路18に接続する幅5.2m以上、深さ1.6m以上の流路である。埋没過程には、流路18と同様に3段階が認められる。当初は、流路18の埋土と共通することから、流路13は流路18の支流として機能していた可能性が高い。しかし、流路18が埋没する以前に流路13の埋没は終了しており、その埋土が自然堆積により埋没した流路18と大きく異なることから、流路13は人為的に埋め立てられた可能性が高いと考えている。

竪穴住居16は、四辺を完存していないものの復原される一辺長は約3mで、やや不整形な方形の平面プランを示す。他の遺構との重複関係により、遺存状況は良好ではなく、明確な壁溝や柱穴は認められない。復原される住居の中心より南東壁よりで、長径90cm、短径67cm、深さ12cmの土坑を検出した。土坑内には、炭の混じる赤色変化した土壌が認められることから、炉跡と考えられる。炉内では、高杯の杯部が倒位で検出された。また、住居南東隅では床面上で小型丸底土器1個体が横位で出土している。これらの土器から、竪穴住居16は古墳時代前期に属すとみられ、遺構の重複関係からも本調査で最も古い遺構であると判断される。

以上、調査成果を概観してきたが、調査地は古墳時代前期以降に土地利用が開始され、その後水田としての利用が中世に始まり、現在まで連綿と継続することが明らかとなった。古墳時代における集落の範囲やその性格、古墳時代から中世までの土地利用のあり方などについては、今後の課題である。
(藤井 幸司)



第2図 第2遺構面 遺構概略図



第3図 第3遺構面 遺構概略図

県立医大跡地（和歌山城跡）の発掘調査

本調査は、旧県立医科大学ならびに附属病院の跡地利用に係る発掘調査で、約410m²の調査を実施した。調査地は、和歌山城三の丸にあたり、「加判之列」の職にあった渡辺主水や御附家老の安藤家など、上級家臣の屋敷地であったことが『和歌山城下絵図』に記されている。調査地の一部は、明治時代以降には和歌山高等小学校として利用されたようである。また、調査地周辺は昭和20年7月9日夜半から始まり、死者1100人以上を出した和歌山大空襲の被害が大きかった地域としても知られている。

調査成果 以上のような歴史的背景をもつ調査地であるため、第二次世界大戦後の痕跡については攪乱として、それ以前については遺構として取り扱った。その結果、調査区①・②では3面、調査区④～⑥では4面の遺構面を検出した。各々、検出した順に第1～4遺構面と呼称した。

調査区①では、第1遺構面で和歌山大空襲によるとみられる焼土の堆積を確認した。焼土を除去したところ、礎石列とコンクリート製床および排水溝を検出した。排水溝内には焼土と多数の赤色化した瓦片が堆積しており、被災した和歌山高等小学校の施設跡とみられる。第2面遺構面では、石組井戸1基、石組溝4条、石積遺構1基、石組柵2基、集石遺構1基のほか、多数の石材使用の遺構を検出した。さらに、礎石2基、礎石据付穴4基などの建物に関連する遺構を検出したものの、明確な建物にまとまらなかった。第3遺構面では、石列2基、石組遺構1基、石組溝1基、土坑11基などを検出した。土坑には、長径5m、深さ1mを超える大きな土坑が3基存在し、これらの土坑からは、陶磁器片、焼塩壺、土人形、泥面子などが多量に出土した。このことから、これらの大規模土坑は塵芥溜めとして機能した廃棄土坑であったと考えられる。

調査区②は攪乱が著しく、第1遺構面は残存せず、第2遺構面で塵芥溜めとみられる土坑1基、第3遺構面で石組柵1基を検出したにとどまる。

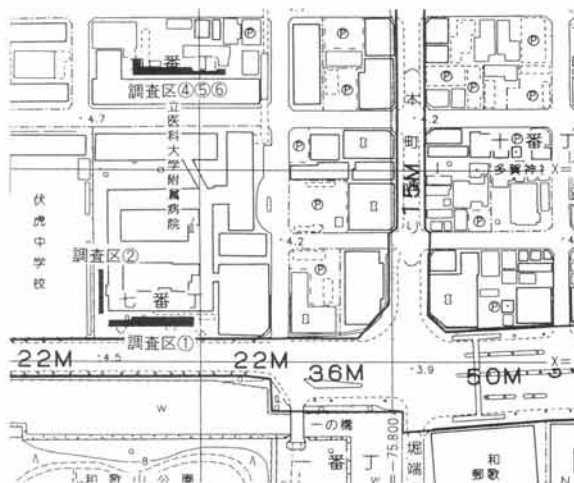


図 調査区位置図 (S = 1 / 4,000)



写真1 防空壕遺物出土状況

調査区④～⑥では、第1遺構面で焼土の堆積を確認した。焼土を除去すると、長軸を南北方向に揃えた防空壕4基が検出されたが、いずれも完存しておらず規模等は不明である。しかし、防空壕内には、焼土、赤色化した瓦、融解したガラス瓶などが堆積しており、うち1基には炭化した穀物の入った壺、重ねられた金属製バケツ6点、金属製小箱1点、洗面器1点などが納められていた(写真1)。第2遺構面では、土坑のほか礎石据付穴を約20基検出した。調査区幅が狭量のため礎石建物の全容は明らかでないものの、礎石建物および建物の建て替えの存在を確認した。第3遺構面は、瓦組遺構1基や溝、土坑を検出したにとどまる。ただし、層位関係から第3遺構面より下層に属すとみられる石材の一部を検出したため、これを第4遺構面として調査した。その結果、石積護岸を備えた南北方向に走る流路状の遺構を検出した。これにより、第3遺構面で検出した石材は流路状遺構の石積護岸の一部であったことが判明した。

今回の調査では、第1遺構面で和歌山大空襲による被災状況の一端が検出された。戦争の悲惨さを今に伝えてくれる貴重な資料であるといえる。第2・3遺構面では近世上級家臣の屋敷地に関連する遺構群を検出したものの、その所属時期や屋敷地内での位置付けなどについては十分な検討を行い得ていない。また、第4遺構面で検出した流路状遺構については近世に屋敷地として利用される以前の状況を示している可能性もあり、今後出土遺物の検討を行い、本調査で検出した遺構群についての理解を深めていく必要がある。(藤井 幸司)



写真2 調査区①全景



写真3 調査区④・⑤

徳蔵地区遺跡第5次調査の概要

日高郡南部川村と南部町の境界部、日本道路公団が平成15年度に完成予定の近畿自動車道松原那智勝浦線（御坊～南部）建設事業に伴う南部インターチェンジ（仮称）建設予定地内は、南部川の旧河川が形成した自然堤防上、及びその後背湿地に位置し、徳蔵遺跡・大年遺跡・高田土居城跡・梅田遺跡・高田遺跡など多くの遺跡群が存在する。また、「八丁田圃」と呼ばれる水田地帯で条里型地割が良好に残っている。全国的に見ても残りが良い中世の平城、高田土居城跡もこの条里型地割の水田の南端部分に位置する。

平成7年度から始まった試掘調査の結果、南部インターチェンジ建設予定地は、中世の包含層が全面に存在し、また、八丁田圃全域に残存する条里型地割の南端部分に該当することから、平成9年度から本年度にかけて5ヶ年を費やし6万㎡に渡る範囲の全面調査を実施・継続してきた。本年度の調査地は、11地区に分かれ、平成9年度から同12年度までに調査を行なった残りの部分である。

徳蔵地区遺跡の調査では、最終の本年度までに縄文時代中期前半の集落の発見から近世の溶解炉の発見に至るまで、各時代を通して数々の重要な意義をもつ成果を収めることができた。

弥生時代前期の井堰（巻頭写真）

本年度の調査の内、南部川寄りの自然堤防の隣接地では、平成12年度の調査地に連続する縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての旧河川などがあり、同時期の縄文土器・弥生土器が出土している。検出した旧河川は、約100m北東側調査地の旧河川から大きく蛇行して続くものと推定される。自然堤防の隣接地に続く旧河川を含め、平野部を網目状に流れる旧河川と周辺地形の復元が具体的に可能となってきた。

まず、特筆されるものとして、旧河川の一箇所から弥生時代前期の河川の流れを制御・調整するための井堰の発見がある。井堰は、高度な土木技術を駆使した本格的なものであり、井堰の土木技術が鮮明に判明する弥生時代前期の例としては全国的に見ても稀である。また、井堰の前面に盛られた土の上から、網代



弥生時代前期の井堰に伴う網代

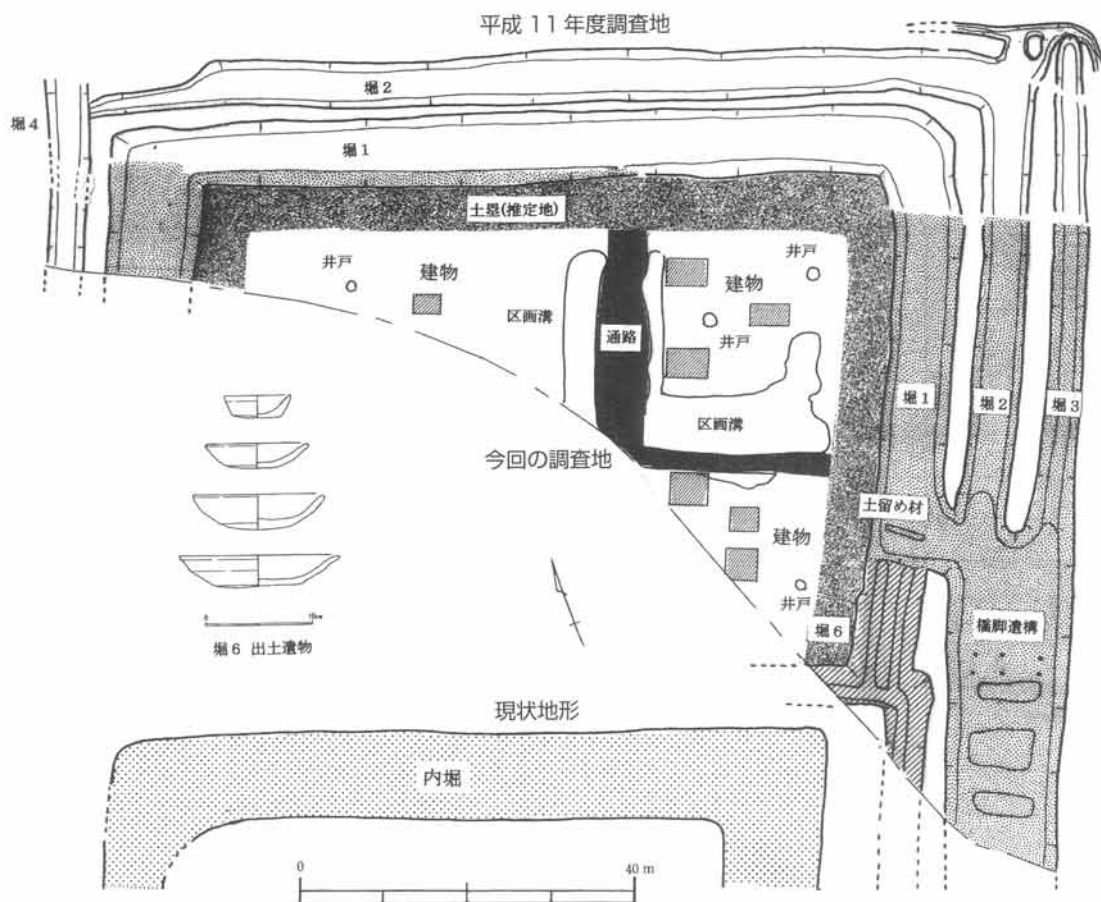
が出土しており、従来知られていた網代を土木技術に利用する事例よりさらに遡るものである。これらの旧河川から、縄文時代晩期の突帯文土器、弥生時代前期の弥生土器、凹石、木製農耕具（横鋤・鋤状木製品）などが出土している。

この旧河川の水の流れを制御・調整する井堰の検出によって、旧河川の下流部ないしは南西側に弥生時代前期の水田域を想定することが可能となってきた。さらに、これらの地区の西側には、南部川によって形成された自然堤防が存在し、その立地上から弥生時代前期の掘立柱建物・土器棺などを検出していることから、今後予定されている西側範囲での国道424号・県道上富田南部線の改修工事に伴う調査の成果が待たれるところである。

高田土居城跡北外郭部（巻頭写真）

次いで、室町時代の高田土居城跡の調査が行なわれ、北外郭部を囲む幅17mの外堀の構造と東西・南北に走る通路・溝で区画された屋敷地から掘立柱建物跡・井戸・埋桶等の存在が明らかとなった。高田土居城跡の東辺外堀内では橋脚遺構・土留め材による護岸などの施設が検出された。また、外堀の北東隅部分の調査において、北側から流れ込む旧幹線水路から外堀2・3に導水する経路が明確になり、外堀の機能の一端を確実に把握することが可能となった。

高田土居城の北外郭部を巡る外堀は、北辺と西辺は二重、東辺は三重である。北辺の外堀はほ



高田土居城跡の北外郭部遺構配置図

はその全容を確認できたが、東辺、西辺の外堀については北辺の延長としての北東・北西隅部分の確認にすぎない。三重の外堀は北外郭部東辺の中程、つまり内郭部に近い地点で1条に合流されている。また、内郭に伴う内堀（堀6）の一部をも確認した。

北外郭部分は鎌倉時代の水田層の上に整地し、屋敷地を築いたことを確認した。また、この整地土は2時期あることも確認した。屋敷地は通路と溝により「田」の字状に区画され、4区画を造り出している。

高田土居城の構造は、従来、単郭の城館として認識されていたが、平成11年度の調査を実施した際に、現地踏査や地形図、航空写真などの読み取りにより複郭の平城であることが明らかとなってきた。発掘調査と現状地形から南北約225m、東西約150mと推定することができるようになり、15世紀から16世紀の平地の城館としては全国屈指の規模を誇ることも明らかとなった。同城館の外堀は、軍事的防御機能を有すると共に水田の灌漑機能をも有すると考えられ、堀内の施設等を含め当時の土木技術の一端が伺え、高田土居城の成立過程とその重要性を考察する中で更に意義深いものとなった。一方で、今年度において県道上富田南部線の改良工事に伴って内郭部の調査が行われた。両地区の成果を重ね合わせることによって、より具体的な高田土居城の実像に迫ることが可能となる。

近世の溶解炉

現有の道路や水路に重複する低地部の調査区からは、中世の水田跡やそれに伴う畦畔・水路などを検出している。高田土居城跡の外辺を囲む外堀の北東隅部分に当り、北側から流れ込む旧の幹線水路から外堀2・3に導水する経路が明確になった。

今次の調査により高田土居城の北外郭部の構造が明確になると共に、土塁推定地及び通路と考えられる地点から、井戸を検出した。三段に積み上げられた井戸枠には、近世の溶解炉が転用されており、溶解炉の炉体を井戸枠として転用した重要な意義をもつ井戸である。近世の溶解炉転用井戸の掘形は直径約1.8mの円形である。残存の深さは約2.5mを測る。井戸枠は炉体を三段に積み上げ、最上段は二重構造をなしていた。一個体の炉体の規模は直径80～85cmの円筒状のもので、やや中膨らみである。厚みは4～6cmを測るが、この内0.5～1cm分は珪酸が高熱により噴き出している。また、中段の炉体部分には直径約20cmの鞆の羽口を差込む穴が認められた。下段



近世の溶解炉転用井戸

の炉体には、殆ど朽ちてはいるが上部と下部に竹の箍で補強していた。また、基底には厚み2cm、縦35cm、横80cmの板材を方形に組み合わせ井戸底とし、その隅頂点毎に長さ40～60cm、直径3～5cmの棒状の丸木を斜めに渡し、その上に炉体を設置している。出土遺物は掘形の上層で瀬戸天目茶碗1片が出土しているのみで、この遺物から井戸の廃絶を17世紀とみることができる。溶解炉が完全な形で発見されたのは日本で初めてのことである。溶解炉が出土したことにより、炉の構造・機能など、日本における鑄造技術の復原が可能になったことの意義は非常に重要である。

高田土居城跡の調査に伴い、土師器皿、土師質鍋、備前焼、瀬戸美濃灰釉、中国製青磁碗などが出土している。この中でも土師器皿の量が大半を占める。備前焼の主体はすり鉢で、甕は少量である。輸入陶磁器は少量で青磁碗が主体である。これらの出土遺物から、高田土居城は15世紀中頃から16世紀中頃にかけて確実に存続していたと考えられるが、通常みられる当該期の遺跡で顕著な中国製染付が皆無である。この傾向が、遺跡の時期・性格を表すものか、今後の検討課題の一つでもある。

室町時代以前の堆積土層

グリッド調査による土層観察から、まず、高田土居城が鎌倉時代の水田層の上に築かれていることを確認した。次に古墳時代の包含層であるが、今回の調査地の南東部分に認められ、調査区外に広がる。この下部には弥生時代前期・縄文時代後期・中期の遺構面および包含層が存在する。昨年度の調査で、本調査地の東側で当該期の竪穴住居や埋甕を多数検出し既に明らかとなっている。本調査地においては、西側の旧河川堆積土を除いて全てのグリッドで確認された。

その他、各地区から、縄文時代中期から江戸時代に断続的に続く堆積層や遺構を確認している。低地部では、中世の水田跡と下部で古墳時代前期の大溝や縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての旧河川も検出している。

今後、平成14年度から同16年度にかけて予定している調査報告書作成に伴う出土遺物整理作業を通して既往の調査成果をも含めた総合的な検討を行なうことによって、南部平野での歴史的な展開を描くことが可能になってくるものと考えられる。

なお、発掘調査終了後に昨年度の調査（第4次調査）において採取していた縄文時代中期の遺構堆積土（土嚢約1,000袋）の振るい作業を行なった。その結果、縄文土器、サヌカイト製の石鏃・削器・剥片、植物の実などの良好な資料を得ることができた。

普及活動として平成13年11月10日（土）に高田土居城跡に関する現地説明会を開催し、地元の一般の見学者を始め、県内各地から約300人の参加者を得た。また、昨年度同様に地元の小・中学校を始め、各種団体の見学が相次いだ。

（土井 孝之）

高田土居城跡他発掘調査

高田土居城内郭部は、幅10mの内堀に囲まれた東西70m、南北50mの空間である。現状は県道で分断されているが、北側部分は非常に残りがよい。南部インター（仮称）の調査では、北辺部の二重三重の堀や東辺部の三重の堀が一条の17m規模の堀に集約されるなど、また北辺外郭部空間の遺構等を検出し、地形から推定すれば、東西150m、南北225mの規模を誇る室町時代の平城であることが判明しつつある。県道上富田南部線道路改良工事に伴う発掘調査は、内郭部に関する初めての調査であり、成立と変遷過程、廃絶時期、また城の外にひろがる水田の時期把握などが調査目的である。

内郭部は、第5層水田層と考えられる層の上につくられている。水田層は、条里制地割の水田層と同一である。北辺外郭部も同様であるため、二町半にも及ぶ水田を潰して、城は形成されている。この層の上に、礫層や大量の小破片となった焼土片、土師器小片を大量に含む2層の整地層がある。出土遺物から第3層は近世、第4層は室町時代と考えられる。

内郭部際の両方で、土塁を検出した。基底部の幅2m、厚さ20cmが残存していた。土塁はシルト質の土を幾重にもつきかためている。第5層上面からは多数の柱穴を検出した。掘立柱建物を主



第5層上面 全景（北西から）

体とする建物が建っていたと考えられる。また層位的には一層上であるが、礎石建物も検出した。形状や出土遺物から一時期古いと考えられる堀6は、今回の調査では、南では堀6として、西では堀2として検出した。堀6と堀2は、同一規模である。外堀も東側外堀として堀7を、西側外堀として堀1を検出した。堀6と堀7には、切り合いがあり、東側外堀に該当する堀7が堀6を切る関係にある。それ故、一時期古い時期に堀6・堀2が存在し、その堀を埋めて大きな東側外堀7が作られたことが判明した。埋めた時期は、徳蔵地区遺跡第5次調査の堀6では、15世紀後半である。堀の形状や出土遺物からみて、堀3・5と堀7・1は、内堀と外堀の関係にあり、条里に沿って掘削されている堀2・6は、一時期古く掘削されている。

今後、南部荘における土師器編年を確立して、高田土居城の変遷過程を詳細に把握する作業が第一の作業である。その上で平須賀城との関係、条里制地割を残す八丁田圃との関係など多くの問題が提起される。

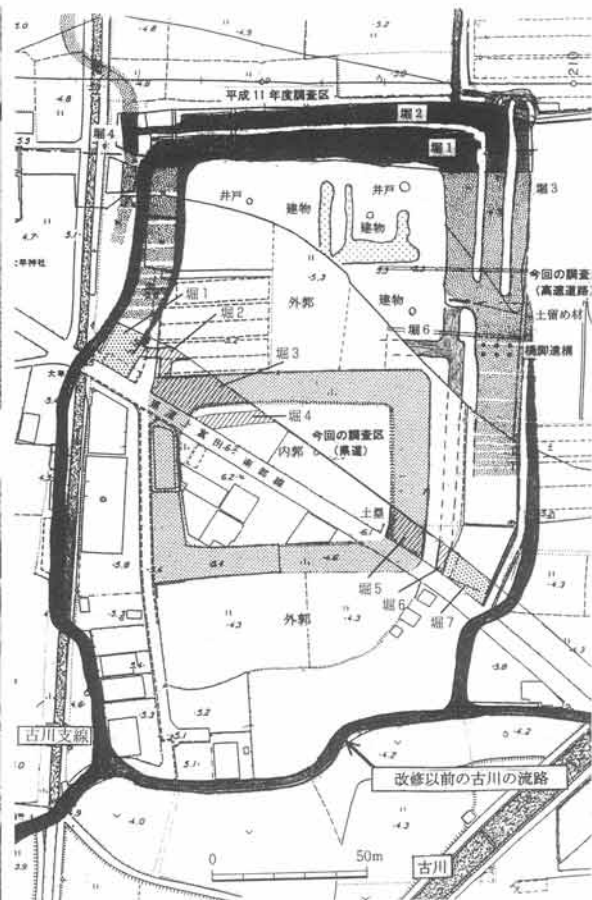
高田土居城の下層からは、第6層の古墳時代前期包含層と第7・8層の縄文時代包含層を確認している。徳蔵地区遺跡では、3,600㎡の規模で、縄文時代集落、弥生時代から古墳時代集落跡を検出した。包含層の確認により集落規模はさらに大きくなるものと考えられる。(渋谷 高秀)



堀3（東から）



建物1（北西から）



高田土居城全体図

古川遺跡他の発掘調査

発掘調査地点は、南部町東吉田地内を流れる古川右岸の延長約200mであり、遺跡としては、古川遺跡のほか梅田遺跡・高田遺跡の3遺跡にまたがるものである。調査区は県道上富田・南部線に架かる梅田橋を挟んで両サイドに分かれ、下流側を①～④区、上流側を⑤～⑧区と仮称している。

このうち①②区においては4棟の竪穴住居を検出した。いずれも出土遺物から古墳時代初頭と考えられるもので、SB-26としている住居（写真参照）を除けばかなりの削平を受けており、残りは極めて悪い状況であった。平面プランはいずれもやや隅丸状の方形で、一辺5mほど、中央に炉が掘られている。この時期の竪穴住居としては、平均的なものと言えるであろうが、このうちのひとつは建替えによる拡張をおこなっており、一辺7mと大型の住居となっていた。なお、この①②区は南側から延びる丘陵地の末端部に当たる場所であり、集落のはずれと考えられよう。

④区は、先に述べた丘陵の末端部から谷地形へと緩やかに落ち込んでいく地点に当たっており、ここでは、その縁辺部を巡る古墳時代後期の幅2mほどの溝を検出した。また、落ち込み際の暗灰色の堆積土から古墳時代初めの土器が多量に出土している。（写真参照）



①～②区全景



⑤～⑧区全景

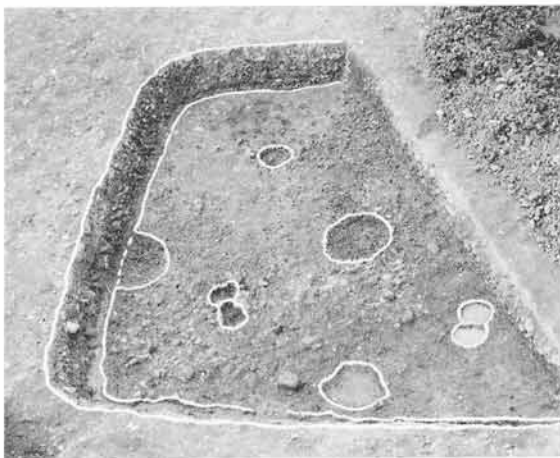
そのほかこの④区では旧古川の護岸を確認した。この旧古川は鎌倉時代の水田層を切って造られており、出土遺物からも中世後期、室町時代（15世紀）になって造られたものと考えられる。これまでの周辺の調査成果から八丁田圃の水田の嵩上げがなされたり、高田土居城が造られたりするものが、まさにこの15世紀であり、古川の整備もこれら一連の大きな動きの中でなされたものと考えられよう。

なお、旧古川については、今回の調査では、前述した中世のもの以外に江戸時代の護岸、近現代の護岸が確認されている。左岸のみの検出であり、各時代の川幅を明らかにすることはできなかったが、左岸での変遷をみると護岸は次第に川の中央へと寄っていつているわけで、時代が新しくなるに連れてその川幅を狭めていった可能性が高いものと思われる。

梅田橋より上流の東端（⑧区）では、微高地の末端部が確認された。この微高地は縄文時代中期の集落や古墳時代初めの集落が営まれていた徳蔵地区遺跡および高田土居城跡が造られていた微高地である。ここでは土拡を除けば住居跡など具体的な遺構は検出できなかったが縄文時代中期と思われる土器片のほかサヌカイト片がかなりの数出土している。

この微高地と前述の④区の丘陵部の間は、谷状の地形となるもので、八丁田圃の東北側の山地から流れ出る水は、この谷間を通して海へと流れ出る以外になく、必然的にここに旧河道が走ることになる。その具体的なものとして、ここでは南東から北西に流れる幅は10～12m、深さ約1mを測る自然流路を検出した。この流路は縄文時代後期のものと考えられるもので、最終的に埋まるのは奈良時代である。

以上、調査の概要を記したが、今回の調査範囲は東西に長く、このため当該地を含む周辺の旧地形を知る上で格好の調査となった。また、出土遺物も多く、遺跡の時代的な変遷を考える上で貴重な資料が得られたものと思っている。（村田 弘）



竪穴住居（S B-26）



④区 暗灰色土Ⅱ 土器出土状況

国道424号道路改築工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査

調査経緯

徳蔵地区遺跡は日高郡南部町・南部川村の南部川下流左岸の微高地から低湿地にかけて広がる縄文時代から近世に至る東西南北約500mの複合遺跡である。近年、高速道路のインターチェンジの建設や大規模な圃場整備事業が進行中である。今回は国道424号線から高速道路への進入路部分の約4,340㎡を調査した。事業は用地買収の遅延から繰越事業となり、平成14年4月末現在で、進捗率は約90%である。調査区は徳蔵地区遺跡や高田土居城跡が存在する微高地北西部の低地部分に位置する。東側から3分割し、①・②・③区とした。

調査結果

①区の調査 ①区では中世の面で、水田畦畔の痕跡を確認した。幅約50cm前後で、主軸が北北西方向で現状の水田区画とはほぼ平行する。この面では人や牛の歩行した足跡を検出した。縄文時代晩期の面で、北から南へ流れる幅約7～9m・深さ約1.0～1.2mの自然流路を検出した。突帯文をもつ深鉢の破片が少量出土した。

②区の調査 ②区では中世の面で、幅約0.3～0.8m・深さ約0.1mの浅い溝を検出した。現状の水田区画とはほぼ平行する。その下の面では、不定形の浅い土坑と北西から南東に流れる幅約2.0m・深さ約0.5mの溝と同方向に延びる浅い溝数条を検出した。平安時代の土師器が少量出土した。その下の面では弥生時代から縄文晩期にかけての不定形の浅い土坑と柱穴状遺構を検出した。

③区の調査 ③区は現在発掘中である。南西部が微高地で北東部は低湿地である。弥生時代から縄文晩期にかけての幅約0.3mの溝や不定形の浅い土坑・柱穴状遺構を確認している。

出土遺物 出土遺物を時代別にまとめると、縄文時代は縄文土器（晩期）・石器（スクレイパー）、弥生時代は弥生土器（前期・後期）、古墳時代は須恵器（後期）、古代は土師器・黒色土器・平瓦、中世は土師器・瓦器・山茶碗・国産陶器・青磁・白磁・土錘、近世は国産陶磁器である。

（黒石 哲夫）



①区 中世の人の足跡



①区 中世の水田畦畔

南部荘園関連遺跡発掘調査

調査経緯

近年、南部町と南部川村では大規模な農業用地の区画整理が実施されることになり、対象地域の埋蔵文化財の有無を確認するために、試掘確認調査を行った。調査地点は南部川左岸の八丁田圃とよばれている条里地割をとどめた水田地帯の古川をはさんだ南部から南東部・南東側の丘陵裾部である。調査は2×2mの正方形の試掘穴（グリッド）を54地点に設定して実施した。

調査結果

南東部の水田地帯は古川旧流路の氾濫原もしくは低湿地にあたり、滞水しやすい地形である。近世の水田層は存在するが、中世の水田層は確認できなかった。古川の氾濫により中世の水田層が流失したか、近世以降に水田が改変されていると推定される。土師器・須恵器・山茶碗・中国製磁器が少量出土した。

南東の熊岡の丘陵裾部にあたる標高9m前後の低位段丘では、奈良時代から中世の遺物が顕著で、東側の台地上には同時期に集落が存在した可能性がある。ほかにも縄文時代から近世にいたる多種多様な土器が出土した。

南南東の東吉田の小丘陵周辺では、縄文土器と弥生土器が出土し、縄文時代の土坑1基を確認した。東吉田I遺跡の範囲内で、縄文時代から弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。

南部の水田地帯は湿地状の地形で、自然流路もしくは小河川と推定される堆積を数地点で確認した。縄文海退の陸地化以降、数条の自然流路が時代ごとに錯綜して南流していたと考えられる。中世の水田層が存在し、中世に水田化され現在に至っている。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器が少量出土した。

南部の段丘から西に延びる微高地では、縄文時代の土坑を1基確認した。縄文時代から中世にかけての顕著な遺物包含層が存在する。 (黒石 哲夫)



水田部の試掘トレンチ



東吉田の試掘トレンチ

重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理

粉河寺大門の保存修理事業は、平成10年10月から48ヶ月の計画で行われている。今年度は、小屋組および妻飾りの組立・造作など木工事、屋根工事および仮設解体工事を実施した。また、雨落ちほか整備工事を平成14年度まで2ヵ年度にわたり施工中である。

粉河寺大門は宝永4年（1707）の建立で、築後約300年を経過している。樺（ケヤキ）・榎（トガ）・松の長尺かつ大断面の材が用いられ、材自体は概ね健全であった。地盤の状態も良く、礎石の不同沈下も見られない。主な破損として、①屋根荷重による軒先の下垂 ②荷重による部材の変形 ③経年によるゆるみ・不陸などが挙げられ、構造補強と荷重（特に屋根）の軽減が主な課題である。構造補強については、昨年度までに木工事と並行して施工を完了している。

今年度は小屋組の組立より開始した。部材は捻れなど多少の変形はあるものの概ね健全で、東ほぞの修理および母屋桁の一部の修理・取替えに止まった。しかし現状の小屋組は、組物の潰れや軒先の下垂が原因と見られる不陸が生じ、特に棟両端の妻飾り部分での下がりが大きかった。組立に当たっては、梁および束の仕口に飼い物を入れて高さを調整し、全体のバランスを見ながら不陸を修正した。

次いで野垂木・野地板を組立て、屋根工事に取りかかった。屋根工事は土居葺きと本瓦葺きである。

土居葺きは、宝永4年当初の仕様がよく残り、貴重である。土居葺き板は、長36cm×幅12cm前後×厚3mmの良く目の詰んだ杉板で、柂目・板目の両方を用いる。竹釘は長3cm×径2mmと、現在市販されているものより細いことが特徴である。施工に当たっては、当初材を極力再用するように努め、また、西面の約2.2m四方分を野地板ごと大ばらしにして置いていた当初材を、元の位置に復旧することを試みた。

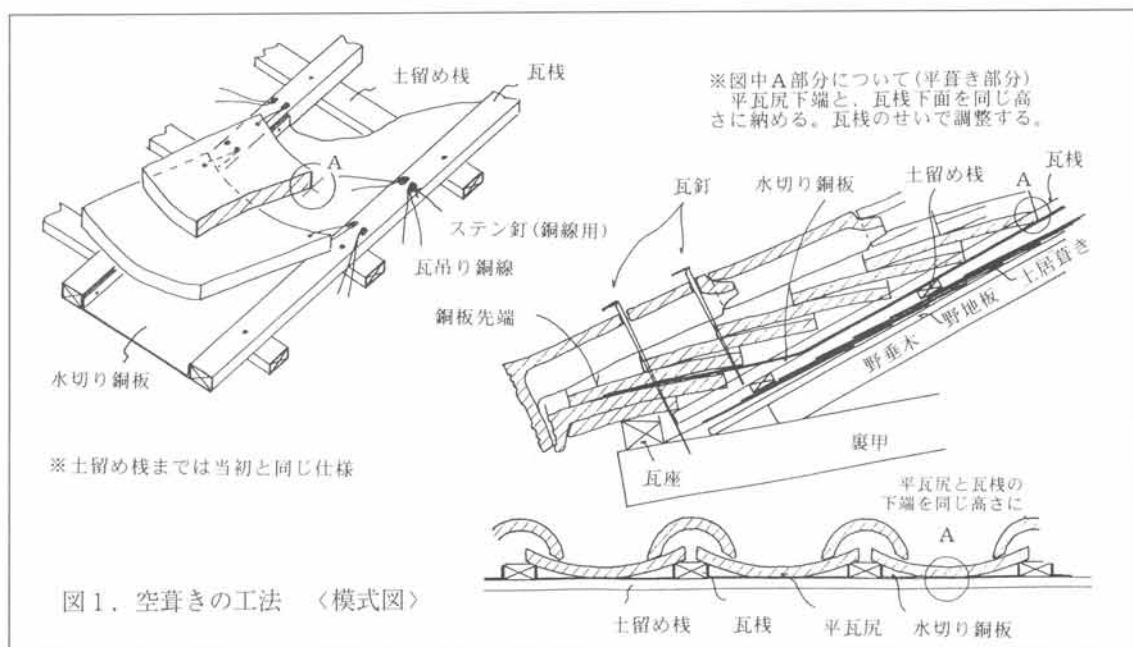
本瓦葺きは屋根荷重の軽減が課題であったので、二階柱通りより外側の瓦を、葺き土を用いない空葺き工法で葺



1. 小屋組組立



2. 土居葺き工事



き立てた。土居葺き板上に瓦棧を取付け、瓦吊り用の銅線で瓦棧と瓦を緊結する。土居葺き上には水切り銅板を敷き込み、雨水に備えた。

柱通りより上部は、従来通り土葺きの仕様とした。当初の葺き土は、明るい黄褐色の粘土質の土で、粘りがあり、切り藁の割合がかなり多く、現在でもよく形状を保っていた。棟積み部分では石灰の固まりが多く見られた。施工に当たっては、平葺き部分は、解体した当初材に切り藁を混ぜて寝かし、二度練り返したものを使用した。丸瓦伏せおよび棟積みは南蛮漆喰に変更した。



3. 空葺き工事

屋根工事完了後、仮設解体工事に取り掛かった。素屋根建設以来、約3年ぶりのお披露目である。ほとんど剥落していた弁柄塗りを復したため、仮設解体と同時に驚きの声が上がったのが印象的であった。

平成14年6月にはすべての工事が完了する予定である。(鈴木 徳子)



4. 仮設解体工事

重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理

旧中筋家住宅の保存修理事業は平成12年2月から98ヶ月の事業期間ではじまり、2年と1ヶ月が経過した。平成12年度までに、各建物の素屋根や工作保存小屋・事務所などの仮設工事を完了させ、長屋蔵の解体に着手した。

今年度は、長屋蔵については基礎までの解体（東面土壁は残す）、コンクリートによる基礎工事を行い、再用する部材の修復を行っている。また、これと並行して屋敷内の各建物が建てられた過程を明らかにするため、すべての建物を屋根まで解体し、使用されている瓦や葺き土、野地や垂木などの部材、構造や工法の相違などを調査した。主屋の土間、長屋蔵、主屋と長屋蔵間の発掘調査を行った（調査は（財）和歌山市文化体育振興事業団が実施）。また、『和佐村誌』や中筋家に残されていた文書を元に建物が建てられた時代背景を明らかにしようと試みた。

以上の解体に伴う調査・発掘調査や文献の調査の結果、江戸時代後期以降の屋敷内建物の変遷が概ね明らかとなり、屋敷構えが現状の規模・形態となったのは明治中期であることがわかった。これを機に現在解体を完了した長屋蔵及び北蔵については、近年撤去されていた間仕切りなどを復旧し、この時の姿に復原するため文化庁に現状変更の手続きを行った。

次年度は、現状変更の許可を受けた後実施設計を行い、長屋蔵・北蔵は本格的に組み上げに掛かっていく。また、主屋・表門などについても解体と調査を進め、復原案を詰めていかなければならない。

（寺本 就一）

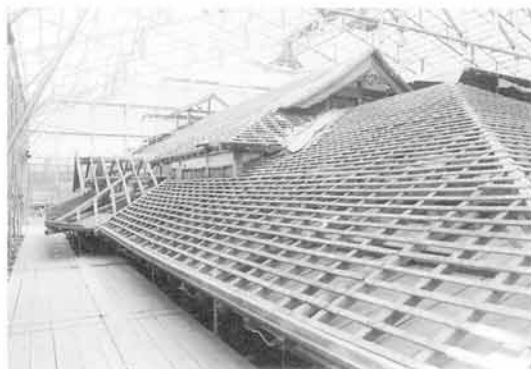


写真1 主屋座敷部屋根の解体状況



写真2 表門屋根の解体状況



写真3 長屋蔵の解体状況



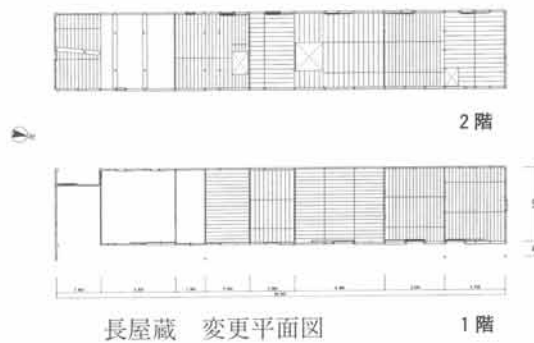
写真4 長屋蔵部材のつくろい

長屋蔵・北蔵の現状変更

修理に伴う調査で旧中筋家住宅の屋敷内建物の変遷の概要が判明した。江戸後期頃と考えられる古図には敷地が現状より狭く、主屋などの形状も現状とは異なって描かれている。敷地を西へ拡張したのと同時期に長屋蔵などを整備し、嘉永5年（1852）に現在の主屋を建てたことがわかった。その後味噌部屋を設け、長屋蔵を増築し、北蔵の庇を整え、明治中期には内蔵や茶室を建てたことがわかった。今回の修理においては現状の規模・形態の屋敷構えが整った明治中期の姿に各建物を復旧整備することとした。

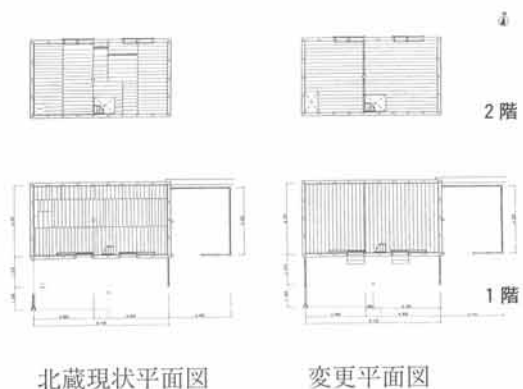
解体及び調査が完了した長屋蔵・北蔵についてはより詳細な変遷が判明した。長屋蔵は敷地の拡張にともない桁行19.7m、梁間4.9mの規模で建築された。その後建物を南へ拡張し、桁行を29.5mとした。南端に通用口を配し、南側2室は土間、北側5室は板敷間とした。その後北土間北側間仕切上の2階間仕切壁を撤去した。明治から大正にかけて南土間上に2階床を設け、昭和40年代には板敷間南側3室を1室とするため間仕切壁を撤去したことがわかった。

北蔵は敷地を拡張した時期に現在地に建てられたと考えられる。長屋蔵の増築時に改修し、南面庇の出を短くするとともに庇西面に通用口を設け、明治中期に東側に下屋を設けた。明治後期から大正頃に1・2階の間仕切壁を撤去し、1階床を張り直した。昭和28年以降には敷地内に自動車を入れるため南面庇や通用口を改修し、入口の石階を撤去したことがわかった。



今回の工事では現状変更許可の申請を行ない明治中期の姿に復原する。長屋蔵は南土間上の2階床を撤去し、南側板敷間の間仕切壁を復旧するほか、東面庇の後補柱を撤去し、北土間の出入り口や2階窓の建具構え、北から2室目の2階上がり口を復旧する。北蔵は1・2階の間仕切壁及び2階上がり口を復旧し、庇柱、通用口の引戸構え、入口の石階を復旧整備する。

(多井 忠嗣)



県指定文化財 荒田神社本殿保存修理の設計監理

荒田神社本殿の保存修理事業は平成14年1月から開始された。本年度は素屋根など仮設建設工事および本殿の解体工事を実施した。

荒田神社は天正年中に兵火に遭い衰微したが、「延喜式」の「荒田神社二座」に比定され、古くは石手庄・山崎庄の総産土神、近世には近隣六カ村の産土神であった。

内陣より発見された狛犬の台座銘に、「寛永元年」に「根来平之内七郎兵衛正信」が江戸城在府の際に、東国より「狛獅子」を贈ったことが記される。本殿の建立年代については資料が無いが、寛永元年（1624）頃とみて大過ないと考えられる。

本殿は彫刻類によって飾り立てられ、向拝の木鼻・手狭は本殿の部材と同じ楠、臺股・正面欄間は目の詰んだ良質の檜を用い、優美で質も高い。向拝木鼻の龍の上面より「屏 □□□（花押）」の墨書が発見され、造営に際し狛獅子を寄進した平之内＝堀内氏の関与があった可能性も出てきた。堀内氏は根来坂本の出身で、寛永9年（1632）に江戸幕府の「作事方大棟梁」職に就任した、当代を代表する大工の一人であった。

臺股彫刻は、向拝東より虎・龍・虎、本殿正面は鶴・亀と仙人・鳳凰、背面は桃・菊・牡丹と、霊獣や吉祥物を刻む。対して本殿側面の臺股では、東面が前より尾長鶏の雄・雌と雛三羽、西面では山鳥の雄・雌と雛三羽となっている。戦乱が去り平和な社会へと移り変わる世相にあって、家族の絆や子孫繁栄が、民衆の願いとして表れてきたものであろうか。

現在の社殿は三間社流造り、銅板葺きである。当初より変更があった箇所として、①旧：向拝中央間唐破風造り→現：三間社流造り ②旧：礎石建ち→現：土台 ③旧：屋根檜皮葺き→現：銅板葺き（昭和37年1962）などが確認できた。小屋組および床組に大きな腐朽が認められるものの、全体に旧状は良く保たれている。

（鈴木 徳子）

彫刻類

左上：向拝木鼻

龍頭

左下：本殿東面臺股

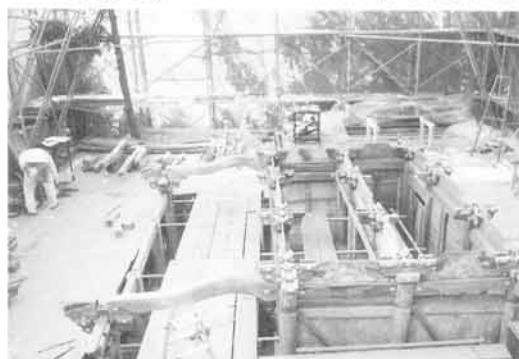
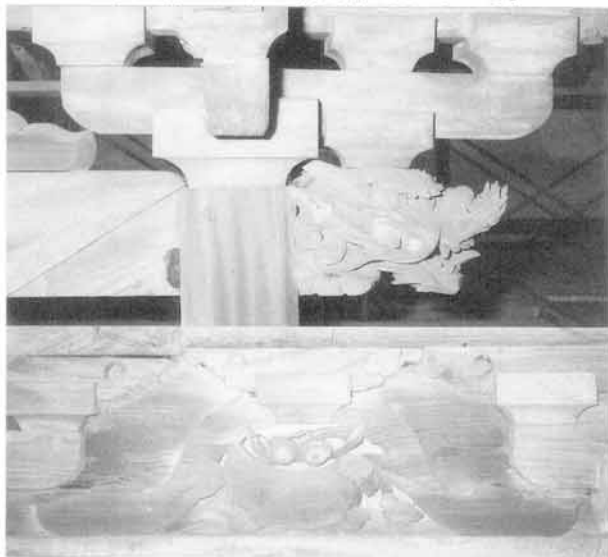
尾長鳥の雌と

三羽の雛



上：木鼻墨書籠書き

下：解体工事



旧中筋家住宅未指定建造物（味噌部屋・茶室）調査

旧中筋家住宅屋敷内には、人力車庫、味噌部屋、茶室、風呂・便所の4棟の未指定建造物が建つ。今年度は味噌部屋と茶室の調査を行った。

味噌部屋は主屋西側に建つ、桁行三間半、梁間二間、切妻造、棧瓦葺の建物で、内部を東西二室に分ける。主屋との間には瓦葺の塀が付き、西の長屋蔵との間にも板塀が取り付く。建築年代は不明であるが、和釘が使用されているいっぽうで、主屋との間の塀を解体調査した結果、主屋外壁が出来た後に、塀を建築していることが、取り合い状況から明らかとなった。これによって主屋建設の嘉永5年以降、和釘使用の下限の明治中期までに造られたものと考えられる。二室のうち西側の部屋は、現状が土間であるが、当初は床があった痕跡があり、使用人の居室と見られる。屋敷内では唯一他の建物群と異なって軸線が振れており、その理由は定かでないが、前身建物の存在も推定できる。主屋前庭からの見通しを防ぐアイストップになっており、主屋西側部分の表と裏を画する重要な役割を持っていたと考えられる。

茶室は主屋と内蔵の北側に建つ、桁行三間、梁間二間、寄棟造、棧瓦葺の建物で、内部は主要二室に分ける。東側四畳半が主室で、中央に炉を設け、南側に床の間が付く。西側の部屋は水屋である。天井は竿縁天井にするなど凝った意匠はないが、数寄屋風意匠の端正な茶室である。建築年は不明だが洋釘と和釘を併用しており、明治時代中期の建築と考えられる。釘の併用は内蔵にもあり、中筋家では明治中期に内蔵や茶室を建築し、現状の屋敷構を整えたことが分かる。

茶室は破損が大きく、素屋根建設の支障にもなるので、いったん解体した。各部の仕様を調査しながら解体を行い、解体部材は復原を考慮し保存格納している。（御船 達雄）



写真1 味噌部屋の外観

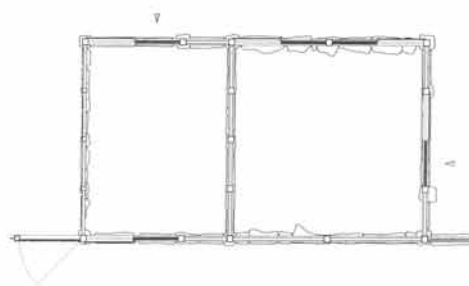


図1 味噌部屋平面図



写真2 茶室の解体状況



図2 茶室平面図

橋本における18世紀前中期町家建築の編年的特徴

和歌山県域民家の編年指標作成のための基礎的調査研究 その4

はじめに

橋本には18世紀にさかのぼる町家が多数現存しており、享保6年建築の火伏医院主屋は町家建築では県内最古である。和歌山県域の町家については、古形式が明らかとなっていないが、ここでは年代の判明する三住宅の復原調査に基づき、判明した平面形式や構造の特色について述べる。

18世紀前中期建築の三住宅

火伏家は江戸時代は塩問屋で、二代前に医院を開業。主屋はツシ二階建、切妻造棧瓦葺、平入形式の町家である。平面は中土間形式で土間沿いに二室を並べ、さらに上手に二室続きの座敷を設ける。棟札から享保6年(1721)建築。上手座敷は聞き取りによれば4代前に作ったという。

池永家は油問屋を営み橋本の町年寄も務めた。八代紀州藩主が伊勢参宮のさい、橋本町御本陣となった。主屋はツシ二階建、入母屋造本瓦葺、平入形式の町家。鬼瓦へら書から宝暦2年(1752)の建築である。整形四間型の平面で、上手には押板形式の床の間がある。

牲川(にえかわ)家はかつては塩屋を営んだ。主屋はツシ二階建、切妻造本瓦葺、平入形式の町家。建築年は宝暦4年(1754)であることが、鬼瓦銘より判明している。復原平面は整形四間型で、一番上手の室列が接客座敷で、上手室には押板形式の床の間が付く。

特質と位置づけ

平面形を大観すると、中土間の火伏医院と、そうでない池永・牲川家とで違いが見られる。このような中土間形式は他家でも見られた。床上部は整形四間で、上手裏側の部屋を接客座敷(書院座敷)にする。18世紀前中期では床の間を押板形式とし、妻側に下屋庇形式で取り付ける。火伏医院の座敷は、未整備であったがゆえに改築されたと考えることもできるだろう。

18世紀前中期の遺構は通り土間と床上が整形四間よりなる、ツシ二階建、本瓦葺屋根の平入町家が一つの標準型としてあったとみることができる。書院座敷は未整備か、押板形式の床の間を付けるもので、発達の上である。軸組と小屋組は上屋梁によって区別され、大場修氏が分類する町家の構造類型では「大梁型」になる。広い土間空間を持った整形四間の平面や、軸組と小屋組の構造からは、橋本の町家は農家建築が祖型であると考えることができよう。(御船 達雄)

(本稿は2002年建築史学会大会研究発表の梗概を改稿したものである)



写真1
火伏医院主屋外観

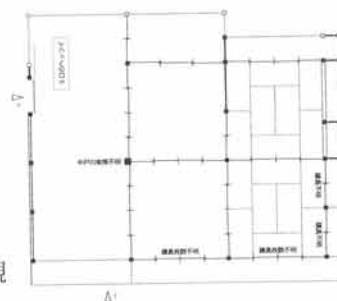


図1
牲川家復原平面図

徳蔵地区遺跡発掘調査現場の普及活動

「聞いて・見て・触れて、歴史実感！」

昨年度に続いて、今年度も日高郡南部町・南部川村の両町村において、様々な事業に関わる発掘調査が実施された。現場で調査を担当した一員として、また、熱い、あつい視線を感じながらの1年間が過ぎた。

本年度も、昨年度同様に地元の小・中学校を始め、各種団体の見学が相次いだ。中でも、「ゆとりの時間」「総合学習」等で、自分たちの住む町・村の地域の歴史を知ろうとする活発な活動が目立ってきた。もちろん、子供たちを指導されている先生方のご尽力に敬服する部分も多分にあるが、飽くまで子供たち主体の活動である。このような成果が出てきたことは、我々、埋蔵文化財に携わっているものとして、本当に嬉しい限りである。

今回、継続して実施してきた徳蔵地区遺跡の発掘調査では、言うまでもなく縄文時代から近世に至る数々の成果を上げている。これらの成果を利用して、地域の方々と共に歴史を実感していきこうと試行錯誤の中で進めてきた。自身この2年間、地域と密着して、相手の顔が見えてきた。

本年度も普及活動一覧にもあるように、様々な年齢層の方が現地見学に訪れた。現場調査が過酷な中、本来の仕事の一環ではあるが、そこまで、やる必要があるのかとの意見も、確かにあった。しかし、子供たちの壁新聞を眼にした時、一つの段階が過ぎたと実感した。今回は、当センターの文化財速報展「紀州の歩み」を南部町において開催させていただくことができ、多くの見学者の参加を得た。これも、我々の活動と地域の方々の意識が結実した結果と考えたい。

今年度は、自分の手に道具を持って土を掘り返す発掘体験はできなかった。残念に思う子供たち、やはり自分の手で、直に掘り当てることの実感が、何にも増して歴史を身近に感じる近道なのかもしれない。調査現場では、「聞いて・見て・触れて、歴史実感！」をキャッチフレーズに考え、埋蔵文化財から、地域の中に密着・浸透していくことを目的として見てきた。これらの積み重ねが、南部町の高田土居城跡に対する史跡公園化構想の一助になったのであれば、今回の徳蔵地区遺跡の調査に係わったものとして、その目的は大いに充実したものであったと自負したい。

早速、平成14年度の当初においても、この地域での当センターとの繋がりが続いている。有り難いことである。次に目指すは、繋がりのネットワークである。
(土井 孝之)



南部町立南部小学校での成果発表

(高瀬幸人教諭提供)

第11回速報展「紀州のあゆみ」を終えて

文化財センターでは、一般の方々に事業内容やその成果をいち早く公開すること、ならびに展示をとおして文化財および文化財保護について普及啓発することを目的として、平成2年度より速報展を実施しており、平成9年度以降は県内を順次巡回して開催している。11回目を迎える本年度は、南部町の生涯学習センター1階ロビーにて開催した。開催にあたっては、南部町教育委員会および南部川村教育委員会と共催し、御坊市文化財調査会には後援していただいた。また、今回の速報展では開催前および開催中にあわせて、速報展関連講座を計3回実施した(写真)。

今回は、昨年度の発掘調査成果を展示したⅠ部「近年の発掘調査成果」、縄文時代～近世までの県内出土土器を時代別に展示した特設コーナー「紀州の土器の移り変わり」、会場所在地である南部町の過去の調査成果を展示したⅡ部「南部町における過去の調査」、文化財建造物修理の成果を展示したⅢ部「文化財建造物の保存修理」、発掘調査により出土した土器片に実際に触れってもらう「お触りコーナー」、以上5つのコーナーを設置し、展示を行った。

従来の速報展では、概ねⅠ部とⅢ部のみの展示内容であったが、今回は新たな試みとして特設コーナー、Ⅱ部やお触りコーナーなどの企画コーナーを設置した。その結果、展示品数は約200点にのぼり、従来の速報展の1.5倍以上の展示品数に及んだ。なお、展示では受付にてパンフレットとアンケート用紙を手渡し、アンケート用紙は展示出口で箱に入れてもらう形で回収した。

開催期間は平成14年2月18日～3月3日の14日間で、期間中の来場者の延べ人数は517人、1日当たりの来場者平均は約36.9人に及んだ。アンケートは225通が回収され、約43%の回収率を示した。主なアンケートの集計結果は29頁のとおりである。以下で、集計結果をまとめてみたい。

来場者は約6割が地元(南部町・南部川村)の方々に、地元での関心の高さが窺われる(グラフ①)。来場理由は、ポスターやチラシによるセンターによる広報活動は功を奏していない。しかし、遠隔地(県内・県外)の来場者中には、これらを来場理由に挙げている人も認められたことから、広報期間(約2週間)に主要要因があったとみられ、十分な広報期間の確保が今後望まれる(グラフ②)。また、速報展は11回目を迎えるにもかかわらず大半の人が速報展への来場は初めてで、リピーターがほとんど認められない(グラフ③)。

展示では、従来の1.5倍以上の展示品数であったにも関わらず、来場者の約7割

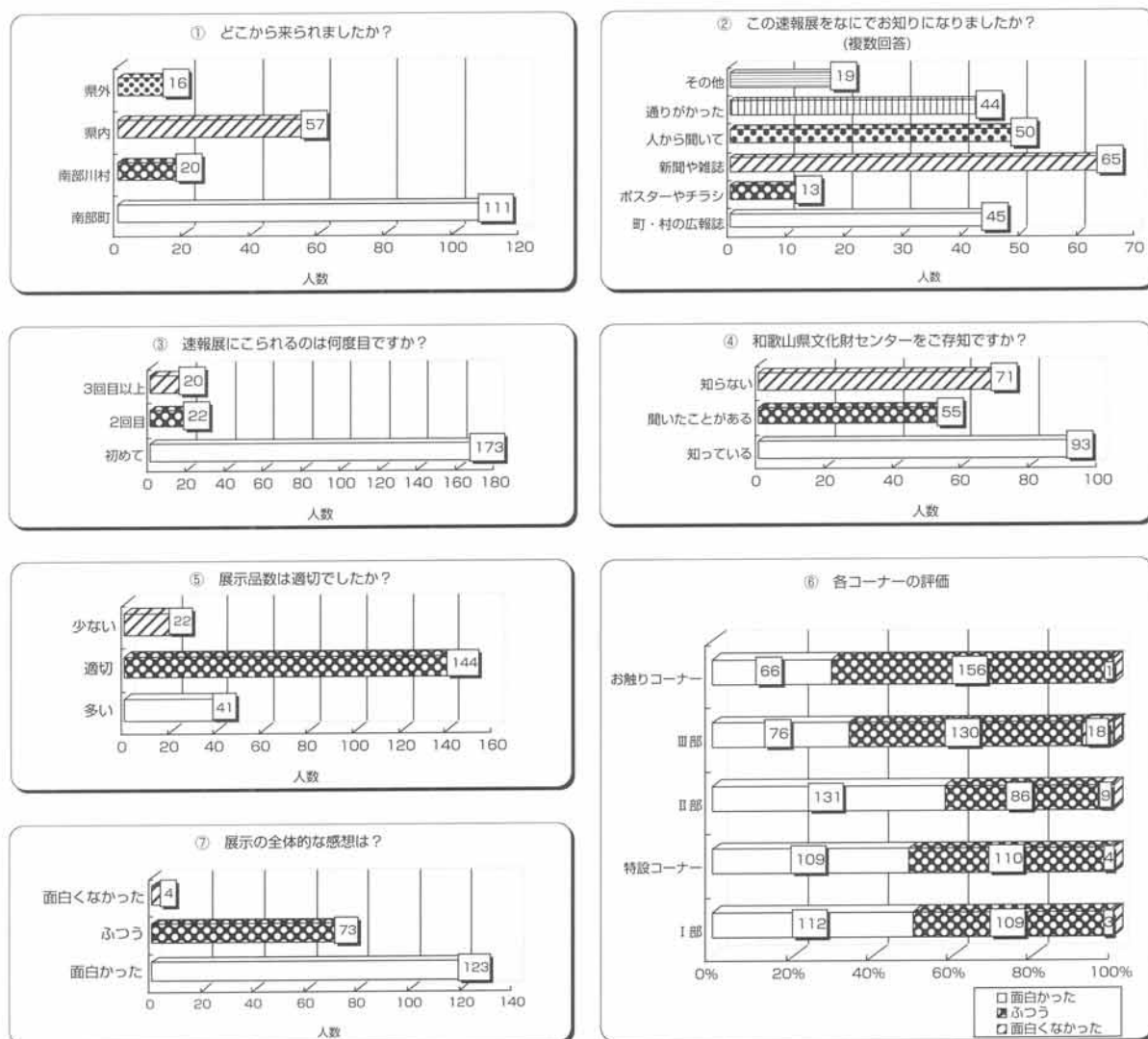


写真 速報展開連講座風景

が展示品数を適切と判断していることから、今後もこの展示品数を維持する必要がある（グラフ⑤）。各コーナーの評価は、Ⅰ部、特設コーナーは「面白かった」が約5割、Ⅱ部に至っては約6割であったことから、今回の新たな試みであった企画コーナーは成功したと判断できよう。ただしその一方で、Ⅲ部とお触りコーナーでは「面白かった」が、3割台に止まっており、内容や展示方法について今後検討する必要がある（グラフ⑥）。しかし、全体としては6割以上の人に「面白かった」と感じてもらっており、今回の速報展は概ね成功であった判断したい（グラフ⑦）。

以上の集計結果をまとめると、昨年度事業の成果を展示するだけでなく、特設コーナーやⅡ部などのような企画コーナーは、今後も同様の企画の継続が必要であると判断される。また、これにより展示品数が維持され、企画コーナーを継続することでリピーターの獲得も期待できよう。また、速報展におけるアンケートの実施は今回が初めてであったが、来場者の意見を反映させ、速報展の充実を図る基礎資料とするため、今後の速報展においても実施していく必要がある。

（藤井 幸司）



平成13年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修(中国)参加報告

本年度の全国埋蔵文化財法人連絡協議会の中国研修は、平成13年11月30日(金)から12月7日(金)までの8日間の日程で、連絡協議会会長水野正好氏を団長に14法人から22名が参加し、陝西省・河南省・上海市の遺跡・博物館並びに研究機関を訪問し、各機関の職員と交流を図り中国の考古学及び埋蔵文化財の現状を実体験することができた。以下日程に従って略述する。

11月30日(金) 関西国際空港～上海虹橋空港～西安咸陽空港～咸陽市

関西空港から13時30分発の全日空との共同運行便、中国東方航空516便で上海虹橋空港へ、ここで東京からの参加者と合流、結団式後、18時25分発の中国西北航空292便で西安咸陽空港に向かう、咸陽には20時40分に到着、航空大酒店で中国での第一夜を迎える。 [咸陽市泊]

12月1日(土) 咸陽市(陽陵・陵邑・陽陵考古陳列館)～西安市(陝西歴史博物館)

前漢景帝(在位 前156～前141)の陵墓である陽陵とその従葬坑、陽陵考古陳列館を訪問する。空港道路建設により従葬坑が発見され、1990年から5月から発掘が開始された。現在81の従葬坑が知られており、彩色陶俑を始め多くの出土品が陳列館に展示されている。陝西省考古研究所陽陵考古隊が発掘調査を行っている陵邑発掘調査現場で調査途中の灰坑の発掘を許された。咸陽からバスで西安に移動し、陝西歴史博物館を訪問する。ここは、北京の故宮博物院に次ぐ中国第2の規模をもち、展示面積16000m²、収蔵している文物37万点といわれている。 [西安市泊]

12月2日(日) 西安市(秦始皇帝兵馬俑・同博物館・半坡遺跡博物館・陝西省考古研究所)

みぞれ混じりの雨の中、ホテルを出発し8時40分過ぎに秦始皇帝の陪葬坑9801に到着する。ここからは、石片を青銅の針金で綴じた甲冑が出土している。これは明器として作られたものとのことであった。続いて陪葬坑K0006を訪問する。ここからは、8体の文官俑が発見されている。兵馬俑坑博物館は、現在3号坑まで公開されている1974年に発見された第1号坑が一番大きく、ここからは6000体以上の兵俑が出土し現在も発掘が続けられている。このほか銅車馬や彩色した俑も出土している。半坡遺跡は、1954年～57年にかけて発掘調査された新石器時代仰韶文化の遺跡である。ここに覆い屋を架け遺跡の一部約3000m²が公開展示されている。この後、陝西省考古研究所を訪問し、最新資料並びに壁画の剥ぎ取りについて説明を受ける。 [西安市泊]

12月3日(月) 西安市～三門峽市(虢国墓地車馬坑・三門峽博物館)

西安のホテル8時30分に出発し、高速道路及び一般道路を經由して三門峽市に向かう西安から約360kmの移動である。三門峽市には、午後1時過ぎに到着する。昼食後、三門峽博物館を訪問する。3階建ての博物館には三門峽市周辺からの出土品を展示している。続いて、虢国墓地車馬坑を見学。西周晩期から春秋時代初期の虢国の車馬の殉葬遺跡で、発掘現場をそのまま公開展示しており、坑内には木製の戦車5輛と馬10頭の骨がある。 [三門峽市泊]

12月4日（火） 瀋陽市（仰韶村文化遺跡）～洛陽市（洛陽考古博物館・洛陽市博物館）

三門峽市のホテルを出発し瀋陽市の仰韶村文化遺跡に向かう。1921年スウェーデンの考古学者 J. G. アンダーソンが発掘し世界的に知られている新石器時代の遺跡である。現地には、記念碑が建てられ、アンダーソンが発掘した遺跡の断面に覆い屋をかけ展示施設としている。バスで洛陽市に向かい洛陽考古博物館を訪問する。展示は、新石器時代前期の裴李崗・仰韶文化・龍山文化を中心に展示されている。続いて洛陽市博物館を見学する。



瀋陽市 仰韶遺跡と展示施設

[洛陽市泊]

12月5日（水） 洛陽市（龍門石窟・洛陽市第二文物工作隊）～鄭州市

龍門石窟は、敦煌の「莫高窟」、大同の「雲崗石窟」と並んで中国の三大石窟に数えられている。伊河に望む東西の石灰岩の岩山約1kmにわたって計2100以上の石窟や石龕が連なっている。この後、洛陽市第二文物工作隊を訪問する。この工作隊は、洛陽市文物局に所属し、市内の建設に伴う発掘調査、上級部門の指示による学術調査を主要な業務であるとのこと。



伊河を挟んで龍門石窟を望む

[鄭州市泊]

12月6日（木） 鄭州市（河南博物院）～上海市（上海博物館）

河南博物院は、北京の故宮博物院、南京の南京博物院とともに名称に「院」を持つ中国を代表する博物館施設である。建築面積78000㎡、展示面積は10000㎡を超え、中国の博物館が所有する文化財の8分の1がここにあるといわれている。展示は、「河南古代文化の光・河南古代玉器展」などの8つのコーナーに分かれている。鄭州新鄭空港から上海へ移動し、上海博物館を見学する。建築面積38000㎡、地下2階、地上5階建ての建物である。収蔵品は、12万件に及ぶという。展示は、「青銅館・陶器館」など11の部門別の常設展示室と3つの特別展示室がある。

[上海市泊]

12月7日（金） 上海浦東空港～関西国際空港

全日空156便にて上海浦東空港から関西国際空港へ、入国審査後、解団式を行う。



研修参加者（龍門石窟にて）

(松田 正昭)

(財)和歌山県文化財センター平成13年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業	12件	文化財建造物保存修理設計監理事業	10件
埋蔵文化財遺物整理等受託事業	2件		

II 会議等

理事会・評議員会等	理事会・評議員会	平成13年4月27日(金)	文化財センター事務局	
	理事会・評議員会	平成13年6月12日(金)	アパローム紀の国	
	理事会・評議員会	平成14年3月22日(火)	アパローム紀の国	
全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係		文化財建造物関係		
(1) 総会	6/7-8	徳島県徳島市	(1) 建造物保存修理事業監督者会議	4/16 東京都
(2) 研修会	10/3-5	岩手県盛岡市	(2) 建造物保存事業幹部技術者研修会	4/17 東京都
(3) 近畿ブロック会議	2/22	奈良県奈良市	(3) 建造物修理主任技術者講習会	9/3-11 東京都
(4) 近畿ブロック主催者会議	8/24	京都府京都市	(4) 建造物保存修理主任技術者等	10/15 東京都
	2/22	和歌山市	連絡協議会	
(5) 第1回OA委員会	6/14	京都府長岡京市	(5) 建造物保存事業主任技術者研修会	10/16-17 東京都
第2回OA委員会	10/19	大阪府八尾市	(6) 建造物保存事業中堅技術者研修会	9/2-5 兵庫県姫路市
第3回OA委員会	2/15	大阪府大阪市	建造物保存事業中堅技術者研修会	9/16-19 奈良県北葛城郡
(6) 近畿ブロック研修会	10/5	京都府向日市	建造物保存事業中堅技術者研修会	10/28-31 新潟県上越市
(7) 海外研修「中国」	11/30	中華人民共和国	(7) 建造物保存修理技術者等近畿	3/8 奈良県奈良市
	-12/7		ブロック会議	

III 普及事業

速報展	「紀州の歩み」第11回 速報展 第4巡回展	2/18-3/3	南部町教育委員会・南部川村教育委員会 共催	南部町生涯学習センター
	関連講座	2/2 2/16 2/23	「縄文の精神世界-埋蔵を中心として」 「紀南の社寺建築について」 「徳蔵地区遺跡の調査成果について」	
現地説明会	徳蔵地区遺跡 ・高田土居城跡発掘調査	11/10	南部町教育委員会・南部川村教育委員会 共催	日高町南部町 気佐藤地内
	旧中筋家住宅修理現場説明会	11/18	和歌山県教育委員会・和歌山市教育委員会 ・和歌山県文化財保護協会 共催	和歌山市祢宜
	古川遺跡発掘調査現地説明会	2/16	南部町教育委員会・南部川村教育委員会 共催	日高郡南部町 東吉田地内

IV 現地見学など

埋蔵文化財（徳蔵地区遺跡関連）		文化財建造物関係	
6/8	和歌山県高等学校社会科研究協会歴史部会見学	5/11	粉/修理現場見学
7/24	みなべ長寿大学7月講座「おおむかしの南部」		- 桃山町文化財審議会
8/2	南部町社会教育委員・教育委員見学	6/2	粉/修理現場見学-紀北ユニセフ
9/8	南部川村立高城中学校PTA親子研修会見学	6/21	粉/修理現場見学
10/3	御坊市・日高郡教育長会議、日高郡教育行政協議会見学		- 和歌山県建築士会
10/4	南部町立南部小学校6年生総合学習	7/6	粉/中 修理現場見学
	「南部の町を調べよう 徳蔵遺跡からの発見」見学		- (財)文化財建造物保存技術協会 養成研修
11/20	南部川村立上南部中学校1・2年生「ふるさと学習」見学	9/29	粉/中 修理現場見学
11/27	大塔村立三川小学校5・6年生見学		- 京都大学(山岸常人氏ほか)
1/23	南部文化の会見学	11/3	紀伊風土記の丘民家説明会
2/16	和歌山県高等学校社会科研究協会歴史部会見学		※ 粉/… 粉河寺大門
2/27	南部長寿大学速報展展示説明		中/… 旧中筋家住宅
3/2	南部町立南部中学校1年生速報展展示説明		
3/19	南部町議会 町づくり特別委員会 「徳蔵地区遺跡の調査成果について」見学		

V 和歌山県文化財センター組織表

理事長 1名	理事 7名	事務局長 —— 事務局次長 —— (専務理事兼務) (2名)	管理課 (3名) 埋蔵文化財課 (13名) 文化財建造物課 (5名)
副理事長 2名	評議員 14名		
専務理事 1名	監事 2名		

VI 職員名簿

事務局長		岩橋 驍		埋蔵文化財課	副主査		黒石 哲夫		
		(4月27日付 専務理事兼務)			技師			藤井 幸司	
事務局次長		畑中 照雄				専門調査員			立岡 和人
事務局次長		松田 正昭		専門調査員				三浦 基行	
管理課	主任	西本 悦子		専門調査員			齋藤 有美		
	副主査	松尾 克人		専門調査員			藤村 瑞穂		
	主事	出口 由香子		調査補佐員			山野 晃司		
埋蔵文化財課	課長	松下 彰		文化財建造物課	課長		鳴海 祥博		
	主任	5月1日から課長補佐 渋谷 高秀			副主査		寺本 就一		
	主任	土井 孝之			副主査		多井 忠嗣		
	主任	井石 好裕			技師		鈴木 徳子		
	主任	村田 弘			技師		御船 達雄		
	主任	佐伯 和也							